

伝統絵蠟燭の研究 II - 伝統的絵柄の調査 -

Studies of Japanese Traditional E-ROUSOKU II
- Traditional Patterns of E-ROUSOKU -

写真学科

内藤 郁夫、昇 愛子

Ikuo Naito and Aiko Nobori

Department of Photography

Abstract

We studied designs of Japanese traditional candle, E-ROUSOKU (picture drawn candle). Aizuwakamatsu city had three typical types, as ware, raised lacquer and picture of the candle in Edo era. Turuoka city also had ware and picture types. After Meiji era, only picture type traditional E-ROUSOKUs have been produced in Tsuruoka, Sakata, Aizuwakamatu, and Nagaoka cities. In this study, we report typical patterns of E-ROUSOKU, more particular patterns of “KAMONSYOKU TEHON”, as a core, which is a pattern book drawn in Tsuruoka city at 1887. The most of pictures are classified into Hanakago type pattern that is flowers (peony, chrysanthemum, camellia, etc), a vase, and a stand. The E-ROUSOKUs of this type of patterns are produced only in Nagaoka city until nowadays, although the technique of the production is passed from Aizuwakamatsu city.

1. 緒言

蠟燭表面に美しい花を描いた絵蠟燭は、花の無い東北地方の冬期、仏壇への供えとなり彩りを与えている。この民芸品は庄内地方（酒田と鶴岡）・会津若松・新潟（長岡）に伝わる独特のものであり、その歴史は18世紀中ごろまでさかの

ぼる。どのように開発され、発展してきたのであろうか。絵蠟燭の歴史・製造法・使用については前報¹⁾で報告した。本報では伝統的絵蠟燭の絵柄特に現存する鶴岡と長岡に残る見本帳の絵柄を中心に考察する。

2. 伝統的絵蠟燭の形と絵柄

2-1. 形と大きさ

いずれの地域にも蠟燭には錘型と棒型がある（それぞれ図1,7参照）。小さいものは棒型が多く、大きくなると錘型が多くなる。従来その大きさは重さの単位貫匁で表示される。小さいものより、七匁、10匁、15匁、20匁、30匁、50匁、100匁である。新潟でのおおよそのサイズを表1に示す²⁾。それ以上のものは特注で生産され、150匁、300匁、500匁、一貫匁、一貫500匁がある。現在、匁の代わりに号が使用される。蠟燭は10本ずつまとめ1束として取り引きされた。日本画タイプの絵蠟燭の絵柄も重さで変わり、大きくなると絵が

表1. 蠟燭の形と標準パターン

号数	重量 /g	棒型 / mm			錘型 / mm		
		高さ	上面直径	底面直径	高さ	上面直径	底面直径
5	19	156	15	10	120	25	14
10	38	185	21	19	150	30	16
15	56	196	24	21	165	34	24
20	75	207	31	27	180	40	41
30	113	229	34	26	195	48	48
50	188	236	43	32	200	60	48
80	300	—	—	—	210	71	46
100	375	253	60	44	240	75	43

精緻になる。

2-2. 絵柄

2-2-1. 庄内地方

皆川重兵衛の伝承（花活筒と伝えられる）³⁾ や願状⁴⁾ から明らかな様に、18世紀中期には細工蠟燭製造技術が完成していた事が明らかである。『辺見家文書』にも「蠟御花活」（文政6（1823）年と天保8（1837）年）が登場する。到道博物館には戊辰の役（1868年）購入と箱書された筆蠟燭が存在する⁵⁾。これより、江戸末期までは細工蠟燭も製造されたいた事が明らかである。しかし、その形・絵柄等の詳細は不明である。明治時代以降の細工蠟燭製造の記録はない。

一般絵蠟燭の絵柄については、松井寿鶴斎の『東国旅行談』⁶⁾（天明7（1776）年）には「潔白なる蠟燭に五色の繪具をもつて花鳥山水木花実和漢の人物美女等をゑかき」と記載されており、晒蠟の蠟燭に多くの絵柄が自由に描かれていた事が明らかである。江戸時代より多くの業者が絵の華麗さを競ったと云われている⁷⁾。以下に紹介する『花紋燭手本』（明治20（1887）年末3月）の絵柄の多くが牡丹や菊を中心とした花であり、その利用の大半が仏事によっていたのではと推論した。

現代に伝わる鶴岡の伝統柄御所車は上から牡丹2～3輪と花籠・御所車・花籠から垂れた布が描かれている（図1）。さらに、『山形県の諸職』では四季の花・蓮華・龍・山水・石竹・人物などがあげられている⁸⁾。富樫雄治氏からの聞き取り調査では⁹⁾、大正時代（1912～1926年）以降南画タイプ（山水画）も描かれたが、それにも8本骨の御所車（源氏車）が付いたとの事である。大正末期（1923年）には転写法が開発され⁹⁾、伝統絵柄（牡丹3輪と花籠・御所車と布）の棒型の絵蠟燭が現在も生産されている。布が御所車の横に黒の線で丸まった糸屑の様に描いた図もある。現在、富樫蠟燭店で描かれる御所車模様は、上の牡丹は赤で花卉を描き、花心は丸い橙色に黄緑の縁取りで表現される。下の牡丹は桃色の花に赤線で花卉を、蕾みを赤と桃色の縞で表わす。緑や黄緑の点

で葉が描かれていた。他の伝統絵蠟燭に比べ、葉の多いのも特徴であろう。



図1. 富樫蠟燭(左)とホシバンろうソクの製品(中、右)
(いずれも棒型蠟燭)

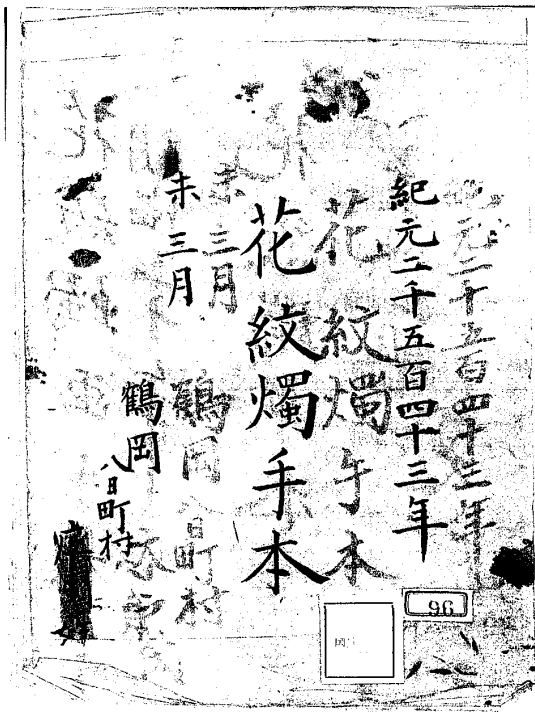
2-2-2. 花紋燭手本

鶴岡市には八日町村大戸正貞氏用の『花紋燭手本』（明治20（1887）年末3月、2ページには「花紋燭手本」と記載）が残されている（全18ページ、サイズ：141x199mm、縦長上綴）。これには、斜め上より眺めた大きい絵柄3画像（P.4, 15, 16）と35の小さい絵柄（内5絵柄は墨線画）が描かれている。基本は花・瓶・台であり、陶磁器における花籠紋様と同じである。絵柄を表2にまとめ、図2に代表的なものを示す。その絵柄は牡丹と菊が主で、椿や菖蒲・梅・撫子と思われる図案もある。特に牡丹と椿の画像は似ており、代表的な花（花卉）と葉の形を表3にまとめ、図3に花の形を示す。牡丹や椿の花卉を「平面形」（図3-2）と「コの字形」（図3-1,-3）とに分けた。前者は花卉を平面的に描いたものであり、後者は花卉を立体的に表わすため内側中心部が凹ませコの字形に表現したものである。いずれも細い蠟燭に

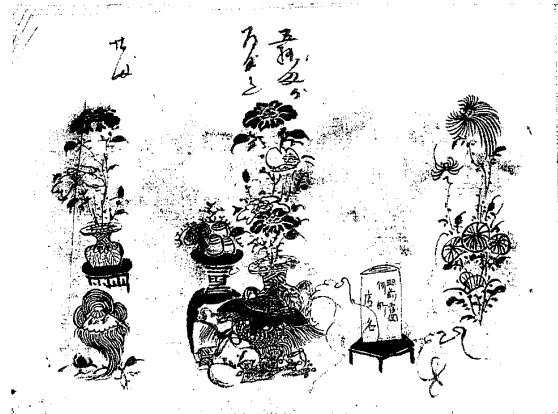
表2. 花紋燭手本の図案

ページ	番号	画像サイズ	蠟燭サイズ	使用絵具数	画 材	図
表紙1		表紙			皇紀 2543 年 花紋燭手本 未月 鶴岡八日村 庄司姓(上より塗り潰す) 花紋燭手本(年代表示:皇紀 2544 年)	図2
2		表紙			表紙と同じ 花紋燭手本画(年代表示:明治 20 年)	
3	1			黒、緑、赤、青、黄	絵具の紹介(6色)、和歌6首(和漢朗詠集2首、源氏物語、古今和歌集3首)	前報
4	2	14x7/cm	記載なし	黒、緑、赤、青、黄	赤牡丹1輪、白牡丹1輪、赤牡丹蕾、焼き物花入れ(青)、 模様付き水差し、筆立て(筆5本)、箱または書籍、台(朱、猫足)、 花や盆栽の鉢2これらにも赤い台	図2
5	3	9x2.5	50匁	赤、緑、黒	右:赤菊2輪、白菊5輪、左:文字入花瓶(羽前鶴岡何町店名)、赤台足黒	図2
	4	9.5x7.5		黒、緑、赤、青、黄	前:瓶、打出の小槌、宝袋、巻物、右大:牡丹4輪(赤2白2)、 赤牡丹蕾、柏模様両腕付き花瓶、左後:珊瑚、打出の小槌、宝珠、赤台(猫足)	
	5	10x3	20匁	黒、赤、青、緑、	赤牡丹1輪、白牡丹1輪、赤牡丹蕾、花瓶(柏の葉模様)、 高足台(天板朱、足黒)布の中に逆向扇(文字:獅子?)、牡丹?	
6	6			黒	上:菊6輪(赤の表現4、白の表現2)、下:短冊(羽前、鶴岡、店名)	
	7	8x2.5		黒	上:菊2輪、中:菊5輪、下:短冊(文字部分を線で表す)	
	8	8x3.5		黒	上:菊3輪、下:菊3輪	
	9	8.5x2.5		黒	椿2輪、梅、焼物山水模様入り花瓶、丸い敷物と台	
	10	9x2.5		黒	釣りがね草?、花瓶 上:桔梗と思われる。下:牡丹?花瓶	
7	12	8x2.5	50匁 20匁	赤、緑	赤菊2輪、白菊3輪、花瓶、赤敷物	
	13	9.3x2.8		墨、赤、緑、青	撫子4輪、焼物花瓶、赤花瓶敷	
	14	8.5x3		墨、赤、黄、緑	崖に牡丹1輪、蕾2箇	
	15	8x2.5		墨、赤、青、緑	上:菖蒲3輪(赤2と青)、下:焼物丸模様入り花瓶、赤台	
8	16	9x3		黒、赤、緑	菊5輪(赤2、白3)、岩(片方崖?)	
	17	8x3		黒、赤、緑、青	柵(赤青)、樹木、鳥居(方足)	
	18	8.5x3		赤、緑、青	菊6輪(赤3青3)	
	19	7.8x3.1		墨、赤、緑	撫子3輪、蕾2、短冊(堂仏)	
9	20	9x3	これより10匁	黒、赤、緑、青	牡丹3輪(赤1白2)、蕾2、一方崖	
	21	9x2.5		黒、赤、緑、青	牡丹1輪、菖蒲2輪(赤、青)、焼物模様(岩と波)入り花瓶、 角架台(天板黒、足赤)	
	22	9x2.6		黒、赤、緑	撫子5輪(赤4白1)、焼物模様入り花瓶、丸架台(天板黒、足赤)	
	23	9x2.5		黒、赤、緑	牡丹2輪(赤白)、布(?),扇(下向、字入り、獅子?)	
10	24	9x2.5	10匁	黒、赤、緑、青	菊7輪(赤2白5)、焼物模様(富士)入り花瓶、架台(天板黒足赤)	
	25	9.9x3		黒、赤、緑、黄、青	珊瑚、小槌、宝壺(?),高足台、中火の付いた蠟燭?、赤敷物、 亀(以上乗せている)、宝袋、宝壺(?)	
	26	9.4x2.6		黒、赤、緑、黄	菊7輪(赤5青2)、一方崖	
	27	8.7x2.5		黒、赤、緑、青	牡丹3輪(赤1白2)、焼物模様(草)入り花瓶、架台(天板黒足赤)	
	28	8.7x2.7		黒、赤、緑、黄	白梅2輪、蕾16、赤椿1輪、模様入り(丸)花瓶、筆立て(筆5本)	
11	29	9.5x4		黒、赤、緑	上の花不明、撫子5輪、下岩	図2
	30	10x2.7		黒、赤、緑、青	菊6輪(赤5白)、模様入り(植物)花瓶、架台(天黒、足赤)、 菊に付いた赤短冊(店の名)	
	31	9.6x2.2		黒、赤、緑	菊7輪(赤2白5)、焼物花瓶、黒敷物	
12	32	10.3x3.2	15	黒、赤、緑	牡丹2輪(赤白)、布、扇(下向き、文字入り)、牡丹蕾 (源氏物語)源氏香とその段の和歌9組	図2
13	33	10x3.2	20	黒、赤、緑、黄	白梅25(花6、蕾)、椿2輪、花籠、架台(天板黒足赤)	図2
	34	10x4.3	20	黒、赤、緑、青、黄	左:牡丹2輪(赤白)、花籠(布付き)、珊瑚、宝壺、赤架台、 右:土壁(窓付き)	
	35	10.7x6	30匁	黒、赤、緑、青、黄	左:絵柄不明(崖?)、右:菊12輪(赤9青3)、花籠、架台(天板黒足赤)	
14	36	11.5x6.6	30匁	黒、赤、緑、青	牡丹4輪(赤2白2)、梅(花4蕾11)、模様入り両腕付花瓶(山水)、 架台(天板黒足赤)、水差し(模様入り)、架台(天板赤足黒)	図2
	37	11x4.4	同	黒、赤、緑	牡丹4輪(赤2白2)、花籠(布付き)、御所車、手前:菖蒲(花と蕾)	
15	38	17.1x10.9	無指定	赤、緑、青、黄、黒	牡丹3輪(赤白赤蕾)、菖蒲3輪(青2白)、花籠(布付き)、御所車、 (現在の伝統柄の原画?)	図2
16	39	16.9x9	100匁	赤、青、黒、茶	前:壺、宝袋、巻物、中:珊瑚、小槌(紐付き)、宝珠、架台(赤、猫足)、 壺、後:白梅、赤椿2輪、模様付き花瓶、黒台	図4
17		裏表紙			文字:垂細亜州東部大日本帝國東山道山形県羽前国西田川郡八日町乙 30番地大戸正貞用	
18		裏表紙			文字や菊の練習、落書き	

描くため、絵柄が単純化されたものが多い。



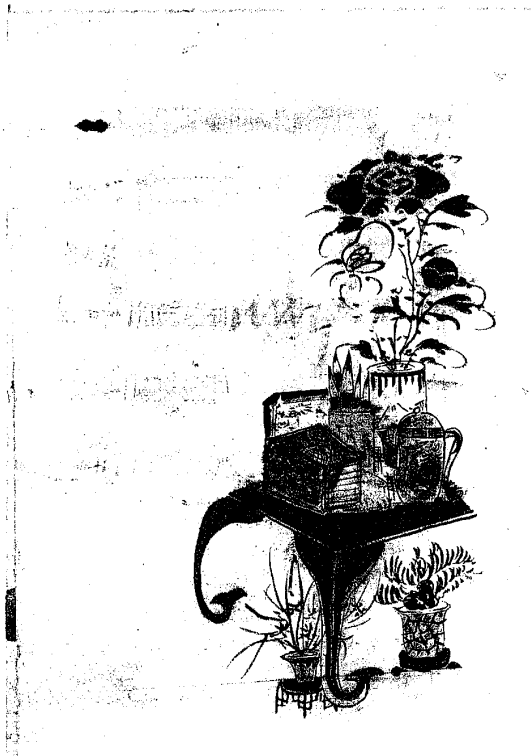
2-1



2-3



2-4



2-2



2-5

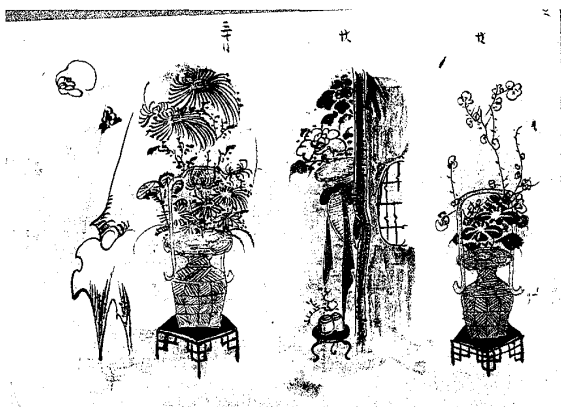
図2-1. 花紋燭手本 表紙 (2-1)、4 (2-2)、5、9 (2-3)、11 (2-4)、12 (2-5)



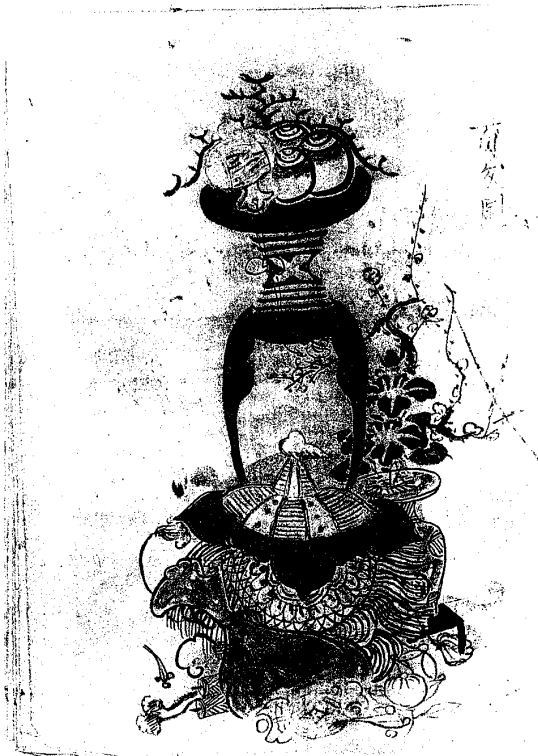
2-6



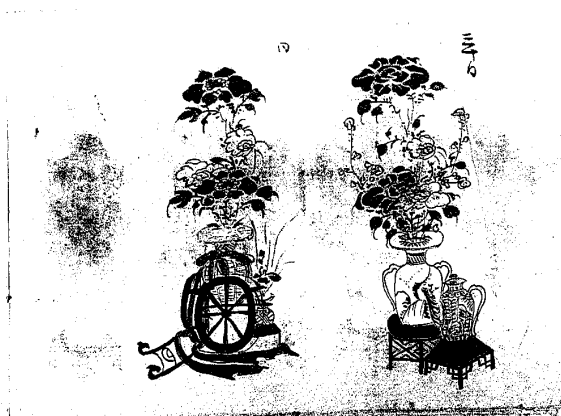
2-9



2-7



2-10



2-8

図2-2. 花紋營手本 13 (2-6)、14 (2-7)、15 (2-9)、16 (2-10)

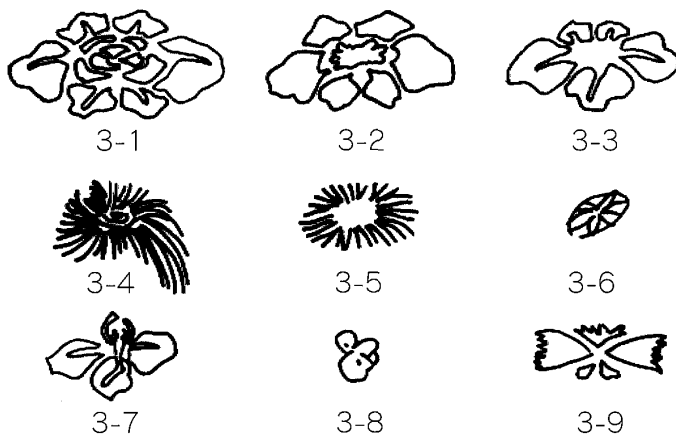


図3. 花の線画 コの字形牡丹(3-1)、平面形牡丹(3-2)、椿(3-3)、菊(3-4、-5、-6)、菖蒲(3-7)、梅(3-8)、撫子(3-9)

牡丹は薔薇科の植物であり、八重の花弁と先が3つに別れ端がギザギザになった緑色の葉が特徴である(P.4(図2の画像番号:2-2),5(2-3),7(2-4),9(2-6),10,12(2-6),13(2-7),14(2-8),15(2-9);12画像)。白牡丹は赤の線画で、赤牡丹は赤い花弁で表わされ、赤白織りまぜて描かれていた。一部、立体的に表現するためか、花弁が「コの字形」をしたものもある(P.5(図2-3中),7,10,14(2-8右))。いずれも八重の花弁が描かれていた。白牡丹には開きかけのものが多く、後側の花弁を大きく手前のは小さく描かれていた。赤い蕾は、赤の円に花弁の切れ目を示す白線を入れて表わしていた。緑で描かれた葉先は、3つに分かれたもの、さらに詳細に葉先を「ギザギザ」を表わしたもの、丸い点に中心葉脈だけを入れたものもある。しかし、その大半は楕円形の点で表現されていた。上部の葉は比較的

表3. 花や葉・茎の色や形(カラー画像のみ)

花種類	色、開花程度	形・描き形	葉の形	茎
牡丹	赤、開いた花 赤、蕾 白、開いた花 白、蕾	赤ベタ、花弁が開く、外側6弁、9、12-13弁 赤ベタ、花弁コの字形、外側6弁 赤ベタ、円に白い線 赤線、花弁の形を描く 赤線、楕円形、7弁	3つに別れる 葉がギザギザ、上に多く下は点 楕円に線 下、緑の点	緑、柔らかい曲線 上に多く下は点
菊	赤、開いた花 白、開いた花	赤線、糸菊 赤線、丸に線を入れて描く	緑の点、	緑、直線的
椿	赤、開いた花	赤ベタ、花弁5枚、花弁コの字形	丸い葉、中心に線	緑、茎短い
菖蒲	赤、開いた花 赤、蕾 青、開いた花 白、開いた花	赤ベタ、3弁、花弁コの字形、角の様な花弁2 赤点 青ベタ、3弁、花弁コの字形、角の様な花弁2 青線、3弁、花弁コの字形、角の様な花弁2 青い不入り	細い長い葉	緑。直線的
梅	白、開いた花 白、蕾	赤線、形 赤丸または赤点	無し	黒、比較的直線
撫子	赤、開いた花 赤、蕾 白、開いた花 白、蕾	赤ベタ、花弁外側ギザギザ、花弁5枚 赤ベタ、赤点 赤線、形(輪郭) 赤線で輪郭を描く、形を葉より抜く	細い葉	緑、茎直線的

大きく精緻に描かれ、下部のものは点で表現されていた。茎は葉に隠れ明らかでないが、分岐や曲がりを想像させる柔らかさが強調されていた。

赤菊は、糸菊の様に、花卉を赤い線で表現したものが大半であった (P.5 (図2-3) ,7,8,10,11 (2-5) ,13 (2-7) ;12画像、図3-4)。花心には赤丸を入れたものが多い。白菊は赤菊と同じ画像中に描かれ、赤線で花卉をなぞって描かれていた (図3-5)。大半は赤い円に放射状の線を入れて表現されていた (図3-6)。一部中心部が空き、花芯を入れた様な絵柄もある。しかし、退色のためか、花芯が認められない。花に続く緑の直線的な茎や小さい点で葉が描かれていた。

椿の花の画像は牡丹と似ているが、一重で5弁の赤い花で、葉が丸く背の低いものを椿とした (P.11 (図2-5右) ,13 (2-6右) ,16;3画像、図3-3)。この花は咲いてもあまり花が開かない。このため「コの字形」の花弁が描かれたと推論した。退色のためか黄色い花芯は認められない。茎も牡丹に比べ短く直線的である。葉は楕円形の緑の点で、中心葉脈を表す細い線が描かれていた。

菖蒲 (P.7,9,14 (図2-8左) ,15 (2-9) ;4画像、図3-7) ・梅 (P.11 (図2-5右) ,13 (2-6右) ,16 (2-10) ;3画像、図3-8。梅はいずれも椿と対で描かれている) ・撫子 (P.7,8,9 (図2-4、右より2番目) ,11 (2-5、右より2番目) ;4画像、図3-9) が花瓶に生けられ、架台に乗った図案もある。この他、鳥居片方 (P.8、上に赤と青の源氏香手習)、書籍や筆の画像 (P.4) ・御所車 (P.14 (図2-8) ,15 (2-9)) や宝尽模様 (P.5,10,13,16 (図2-10)) が描かれていた。大きい御所車 (P.15 (図2-9)) は、プリント柄の原画となった図案と推論され、上から赤白2輪と赤い蕾の牡丹と白と青2輪の菖蒲とが赤いリボンの巻いた籠に活けられ、8本骨の御所 (源氏) 車に乗せられていた。牡丹の葉も葉脈を入れ精緻に描かれていた。赤い布 (リボン) は御所車に絡んで垂れ下がっている。サイズの表示はないが、百匁蠟燭の図と想像される。宝尽模様 (P.16、図2-10) は左上に百匁図と重さを表示し、上より珊瑚、打出の子鎚、

宝珠の玉が背の高い赤い台にのり、下には瓶・巻き物・袋が描かれていた。左後方には花瓶に生けられた白梅 (赤線で縁取り) と椿3輪が描かれて

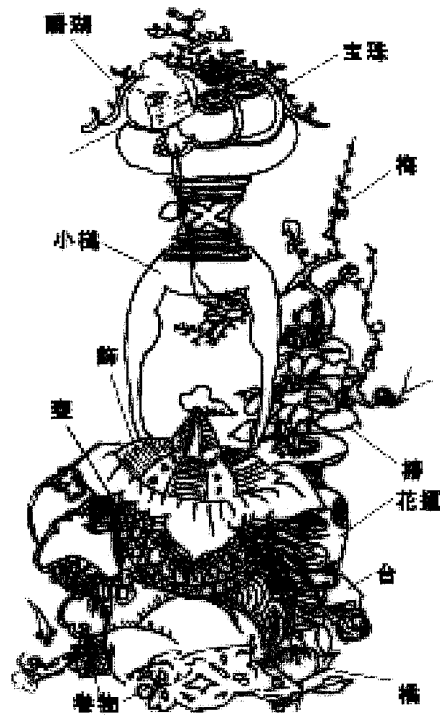


図4. 宝尽模様の線画

いた。図4に線画を示す。

花瓶や架台の図案も興味深い。広口の花瓶から磁器と考えられる細口のものまである。その模様も、山水 (P.4 (図2-2) ,6,10,14 (2-8右) ;4画像) ・植物 (P.5 (図2-3中・左) ,10,11 (2-5左より2番目) ;4画像) や波 (P.9 (図2-4右より2番目) ;1画像) が細かく描かれたものから、青い釉薬が流れたものまである。小さい画像には花瓶が付いたり付かなかったりしているが、大きい画像には編み上げ籠の様な細口な花器 (P.13-15;5画像) も描かれていた。架台も赤の猫足で精緻に描いたもの (P.4 (図2-2) ,16 (2-10)) より、黒の線で簡単に表したもの (P.5 (図2-3)) ・足の線まで省略したもの (P.7 (表2では赤の敷物と記載) ,11 (5, 敷物?)) まである。図案の精緻さは蠟燭の太さによると想像される。さ

らに、花に「店名」(P.6,11 (図2-5))や「堂佛」(P.8)の短冊が付いた3画像(墨書2画像とカラー1画像、花に赤で縁取りされた短冊が付いた形)、花の横に花台に乗せた灯籠をおき行灯に店名と住所を入れたもの(P.5 (図2-3))もある。

6本の絵筆を描いたページ(P.3)もある¹⁾。筆の文字(■ ■ (■:判読不能)・松蘿・紅蘿・青乱・素影・玉■)より絵具については前報で論述した。「素影」の筆には赤で源氏香「葵」と2文字(■ ■)と、3行の線が描かれていた。筆の横には和歌が一首書かれている¹⁰⁾。玉■の筆には黒字の源氏香(「玉葛」または「手習」)と和歌の一部(「君が代■巖■なりて」、右下判読不能)が書かれていた。その横には上に赤で源氏香(「早蕨」)の書き掛け(棒一本欠落)と「手習」と下に和歌5首(墨書)が記載されている。墨書の源氏香(上)とその帖の和歌(下)9組が描かれたページ(P.12 (図2-6))もある¹¹⁾。

2-2-3. 会津若松の絵蠟燭

江戸時代、会津では「細工タイプ」、「蒔絵タイプ」、「日本画タイプ」の3タイプの蠟燭が生産された。これら3タイプを1882年モースは収集している¹²⁾。

伝統絵蠟燭	┌	細工タイプ(献上物) 筆蠟燭、巻物蠟燭、筍蠟燭
		蒔絵タイプ(置上物) (モースコレクションに現物あり)
		日本画タイプ(並物または通常物) 通常の絵蠟

『新編会津風土記』(「筆幹竹筍のかたち真にせまり」¹³⁾に記載された筆蠟燭・筍蠟燭と巻物(宝典)蠟燭が細工タイプであり、「献上物」ともいわれる。筍蠟燭の細かい葉は欠落しているが、巻物蠟燭とともに小沢蠟燭店に現存する(図5)。山形屋蠟燭店では筆蠟燭が試作されている(図5右)。

蒔絵タイプは「置上物」といわれ、泥絵具で厚く肉付けし、表面凹凸を利用して蒔絵の様に描いた蠟燭である。モースコレクションの写真では、蠟が吹き著しく退色しているが、菊(大輪の厚もの3輪)の様な模様である。花卉一つずつ表面凸



図5. 細工蠟燭の写真、左より筍蠟燭、巻物蠟燭、筆蠟燭

部に描かれていた。葉は凹凸の無い曲面に描かれていた。下部には凹凸を利用して茶および黒の模様が描かれているが、不明である。一部の蠟燭店や研究者は会津塗りの影響を示唆している¹⁴⁾。しかしモースコレクションにしか現物がなく、その技術を継承する者もない。

日本画タイプは「並物」とか「通常物」といわれるが、専門の絵師が絵を丁寧に描いていた様である。『若松風俗帳』(文化4(1807)年)では、「草木花鳥魚鱈を画き」と¹⁵⁾、『会津若松市史』では「季節により絵模様が変わりウメ、サクラ、ツバキ、サツキ、ポタン、キク等の花」と記載されている¹⁶⁾。種々の花の絵柄を主に描いたと推察される。福島県立博物館佐々木長生氏によれば、江戸時代末期の会津養蚕(コガイ)焼の絵柄も残っているとのことである¹⁷⁾。

聴き取り調査では、ホシバンロウソク店に伝承される伝統的絵柄は牡丹(上)と菊(下)で、古くは最下部に甕と台を描いたとの事である。大正期(1911~1926年)には南画(山水画)や家紋を入れた蠟燭も生産された。現在、牡丹と菊に瓶の付いた棒形10号蠟燭(L150mm×H23mm×L20mm)が2本残されている。牡丹(5輪)は

赤の線で、菊（3輪）は黄色く彩色した上に赤線で花弁が縁取りされている。開いた花弁と蕾んだ花弁との間は太い線で表し、花心は描かれていない。上部の緑の葉は先で3つに分かれ、下では点で表す。個々の花に極端な大きさの違いが無く、前面にバランスよく配列されている。この絵柄は陶磁器における花籠紋様と推論できる上品な絵柄である。

2-2-4. 長岡の絵蠟燭

江戸時代の絵柄は不明との事であった。現在生産されている（現在の絵師の描く）伝統的絵柄は菊と牡丹の2絵柄である（図6中と右25号錨型、L185mm×T40mm×B20mm）。赤蠟燭には5輪の牡丹と蕾2個・甕と台が描かれていた。上部には斜上方から見た桃色の花が大きく描かれていた。花弁は白・ピンク・赤の3色で、その濃淡も表現されていた。花心は橙色に緑の点で表現されていた。その下には、上方から見た黄色・桃色・橙色の牡丹が花3輪、箔押しした上に花の色の線で花弁が縁取されていた。花心は6-7の赤点で表現されていた。この他、横から見た花を白とピンクの線で表し、蕾みは桃色の大きい点で表現されていた。3裂の葉が描かれており、葉脈を金線で描かれていた。葉や瓶の描き方は白蠟燭と同じである。猫足の台は水色で描かれていた。甕と台は会津若松では忘れられた部分である。

白蠟燭（図6右、25号、L185mm × T40mm × B20mm）には5輪の菊と瓶・台が描かれている。上部の赤い大菊は横から眺め上げた様に描かれ、赤線で花弁を表し17枚の花弁が放射状に開いていた。その下には斜上方から見た菊が三輪（黄・白・赤）描かれている。これらの菊は金銀の箔を貼った上に各々の絵具で花弁が縁取られ、中央部には赤色または黄色の6～7個の点で花芯が表現されていた。その横には、横向きの白菊も描かれていた。葉は緑と黄緑の点で表わされ、葉脈には金線が入っている。甕は銀箔に青線で表し、釉薬の流れや青海波紋が青線で描かれていた。下には猫足の花台が赤線で描かれていた。



図6. 長岡の伝統絵蠟燭、左より先代絵師の描いた絵蠟燭、当代の描いた赤白の絵蠟燭（いずれも錨型蠟燭）

この他、先代絵師の描いた絵蠟燭（50号錨型、L225mm×T45mm×B23mm）も残っていた（図6左）。白蠟燭に6輪の牡丹瓶・猫足の台が描かれている。蠟燭の上部には斜上から眺めた赤牡丹で、花弁が大きく広がって描かれている。その下には金箔を貼り赤線や黄色線の花弁を縁取った牡丹が2輪、斜上から眺めた赤・ピンクと白の牡丹が1輪ずつ描かれている。白牡丹には銀箔を貼った上に八重の花弁が丁寧に描かれており、ピンク牡丹と白牡丹の花弁の間は赤で細かく表現されていた。金箔と黒線で表した甕には藤が絡み付き、白い花が垂れ下がっていた。これらの絵柄は会津の日本画タイプのもと同じ花籠紋様（花・甕・台）であり、金銀の箔の使用も特徴である。

絵付師宅には大正時代（1912～1926年）の精緻に描かれた見本帳（サイズ：207×282mm、色紙状の厚紙を縦長横綴した本）が残されている（図7）。これには（2～13号、1号絵柄欠）左右12対の碇形蠟燭が描かれている。6絵柄は家紋付蠟燭、5絵柄は花柄（牡丹、菊、紅梅、枝垂れ桜）である。これらの花には必ず甕と台が付く（表4）。家紋名入蠟燭は、金箔で紋を詳細に表し、朱の縁取がある。図7には対の絵蠟燭の左側のものを示す。絵蠟燭は仏事で主に使用される。施主

の家紋を入れ、青の枠内にはで贈り主の名を入れる。珍しい絵柄に御幣を金箔で描いたものもある。これらの絵柄は精緻に描かれており、50号以上の比較的大きな蠟燭に描いた絵柄と推論できる。絵

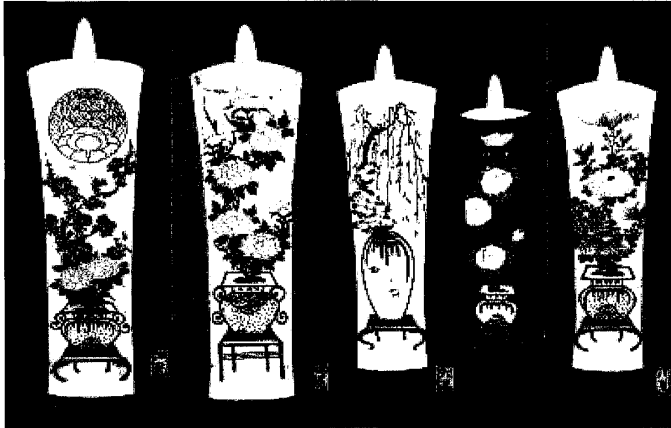


図7. 長岡絵蠟燭見本帳、左よりp.2,4,6,8号左側蠟燭見本（いずれも錨型蠟燭）

柄を表4に示す。

3. まとめ

いずれの地域でも、伝わる主な伝統的絵柄は花籠文様と推論できる。これから甕や台を省略したものが多く、磁器の絵柄の影響が強く示唆される。描かれた花は牡丹と菊が多く、梅・椿その他の花も描かれていた。しかし、絵蠟燭に関する古い文献『東国旅行談』や『若松風俗帳』での記載は必ずしも花籠紋様とは考えられない。これより、当初の絵蠟燭は比較的自由に絵が描かれていたのではないかと推論した。鶴岡では18世紀末から不幸での記録文書に絵蠟燭が登場する。会津若松から伝播した長岡においても、不幸での利用が大半である。江戸時代末期に到り、仏事での絵蠟燭の利用が多くなり、花籠文様が中心に描かれたと推論した。現在、各地の蠟燭店ではアクリル絵具で四季の草花を描いた小さい（5～10号）絵蠟燭が多く生産されている。蘭等の洋花も多い。これらは

表4. 長岡絵蠟燭見本帳

番号	蠟燭色	家紋の表現	絵柄	掲載
2	白	金字、赤縁取	紅梅(上)と黄色牡丹(下、花卉に赤縁取、葉脈に金線、葉は丸形)、把手付き丸形瓶(首四角口丸、青点の模様、釉薬の流れ、下に青海波紋)、猫足の赤い花台	○
3	白	金字、赤縁取	—	
4	白	—	黄色牡丹(下、花卉に赤縁取、葉の先3つに別れる)、把手付き丸形瓶(首四角口丸、青海波紋、青点模様)、赤い花台	○
5	赤	金字、赤縁取	白文字(追吊會)	
6	白	金字	枝垂れ桜、菊(黄、葉は点)、壺形瓶(釉薬の流れ、千鳥の模様)、3号絵柄と同じ瓶と台	○
7	赤	—	黄菊(5輪、白円に黄で花卉、葉の葉脈白)、2号絵柄と同じ瓶と台(台は淡赤)	○
8	白	—	赤糸菊(5輪)、青菊(2輪、花卉の中心部濃い)、黄菊(2輪、花卉を赤の縁取り)、2号絵柄と同じ瓶と台	○
9	白	金字	—	
10	赤	—	黄文字(左:奉、右:納)、下に文字用青枠	
11	赤	金字	—	
12	白	—	黄御幣(赤縁取)、細い花瓶(全面青海波紋)、2号絵柄と同じ瓶と台	
13	赤	白字	—	

いずれも土産物として販売されており、その利用法によりデザインや価格が大きく変化する。

謝辞

本研究を進めるにあたり、福島県、山形県、新潟県の多くの蠟燭業者・熟練技術者から貴重なお話と資料を戴いた。また、致道博物館犬塚幹士氏・鶴岡市立郷土資料館秋保良氏・福島県立博物館佐々木長生氏には多くの史料を戴き、この他多くの御教示を戴きました。有田陶磁器文化館鈴田由紀夫氏には『花紋燭手本』の図柄について多くの御教示を戴いた。同資料記載の和歌の解説は本学図書館宮丸由美子氏にお願いした。これらの方々の御助力により小論をまとめられた。ここにお世話になった方々に深謝する次第です。

文献

- 1) 内藤郁夫、「伝統的絵蠟燭の研究 I-歴史と製造法を中心に-」、九州産業大学芸術学会研究報告,38,171-180 (2007)
- 2) 松井蠟燭での聞き取り
- 3) 伊藤多三郎監修：鶴岡市史、上巻、鶴岡市役所、(1974) 654-655; 庄内人名辞典刊行会編集出版、庄内人名辞典、(1976) , 612.
- 4) 鶴岡市史編纂会編：鶴岡市史資料篇庄内史資料集11、鶴ヶ岡大庄屋宇治家文書上巻 鶴岡市、88, 1982 (全文を記載する)「蠟燭屋御用之二文字御免願 乍恐以書付奉願上候 拙者儀 兼而蠟燭家業仕罷在候所 御在城之節 従御次向御用花紋燭度々被仰付 指上 其上筆蠟燭等 乍恐内々献上相納 冥加至極難有仕合奉存候 此上恐多奉存候 共何卒以御威光 御用之二文字蠟燭看板被 仰付被下置候 八重々難有仕合可奉存候 午十月 皆川重兵衛 肝煎惣兵衛殿 願之通被仰付候」
- 5) 京都市多田敏捷氏が到道博物館に寄贈した箱入り蠟燭。箱書は「(蓋表右) 先考戊辰之役十月五日庄内ニ於テ求メラレシモノ、(左) 庄内蠟燭、(裏蓋上) 素影、(上右) 羽陽大泉、(上左) 皆川重製、(下右) 羽陽大泉トハ庄内ノ別名ニシテ庄内ハ最上川、(下左) 川口左右ノ総称ナリ」である。
- 6) 酒田市史編纂会編：改訂版酒田市史 (上巻)、酒田市、(1987) , 844. (松井寿岳斎の紹介や『東国旅行談』の前段が同資料に紹介されている。)
- 7) 富樫蠟燭店主富樫雄治からの聞き取り調査。
- 8) 山形県文化財保護協会編集出版 (話者・富樫雄治)、山形県の諸職 (伝統的手仕事)、(1987) , 209-212.
- 9) 鶴岡市伽羅屋が 1923 年に特許申請し、認められた。
- 10) 素影筆の横の和歌は『和漢朗詠集』の「山川のみき (お) は まされり春風に 玉 (谷) の氷は けふやとくらむ」で、誤字と思われる箇所を () 中に修正した。
玉■の筆の横には上に源氏香「玉かずら」の中棒の欠落と「手習」であり、その下には和歌「恋わたる 身はそれなれど 玉かつらの何なる筋を 尋ねきつらむ」(『源氏物語』「玉かずら」の帖) が記載されている。その左には「君が代は 千世に八千代に さざれ石の 巖となりて こけのむすまて」(『古今和歌集』)、「谷風に とくるこおりの ひまごとに うちいつるみや 春の初花」(『古今和歌集』源当純作)、「あら玉の 年たちかへる あしたより またるものは 鶯の声」(『和漢朗詠集』)、「なつこのよの ふすかとすれは ほととぎす なくひとこゑに あくるしのめ」(『古今和歌集』紀貫之作) が記載されている。
- 11) 右には牡丹の絵柄と牡丹の花が描かれている。その左には源氏香 (上) と和歌 (下) が対で記載されている。右より (1) 源氏香は「梅枝」で、和歌「花の香は 散りにし枝に とまらねど うつらむ袖に あさくしまめや」はその帖の和歌である。(2) 漢字で総角 (あげまき) の記載があるが、源氏香は「竹河」

または「蜻蛉」で、「あげまきに ながきちぎりを むすびこめ おなじところに よりもあはなむ」は総角の帖の和歌である。(3)「空蟬」で、「うつせみの 身をかへてける 木のもとに なをひとがらの なつかしきかな」はその帖に記載されている。(4)「若紫」で、「手につみて いつしかも みむむらさきの ねにかよひける 野辺のわかくさ」はその帖の和歌である。(5)源氏香には縦棒が4本しかなく誤りだが、「よりてこそ それかとも見め たそかれに ほのぼの見つる 花のゆふがお」は夕顔の帖の和歌である。(6)「末摘花」で、「なつかしき いろともなしに なににこの 末つむ花を 袖にふれけむ」はその帖のもの。(7)「蓬生」で、「づねとも われこそとはめ みちもなく ふかきのもとのもとのこころを」はその帖のもの。(8)「玉かずら」で、「恋ひわたる 身はそれなれど 玉かづら いかなるすじを 尋ねきつらむ」はその帖のもの。(9)「行幸」で、「をしほ山みゆきつもれる 松原に けふばかりなるあとやなからむ」はその帖のもの。

- 12) 小西四郎、田辺悟編、モースコレクション日本編モースの見た日本、小学館、(1989)、105.
- 13) 新編会津風土記、卷之十五、陸奥国若松之四、大町の項；丸井佳寿子監修：新編会津風土記、第一巻、歴史春秋出版、(1999)、210.
- 14) たとえば、七日町三・四青年会主催：七日町のいまむかし＝市民寺子屋・親子ふるさと教室＝(資料)(1983)、10；滝沢洋之、野口信一著、会津若松史22●民俗編2 諸職 職人の世界、会津若松市、(2002)、53.
- 15) 若松風俗帳；庄司吉之助編：会津風土記・風俗帳・卷三巻文化風俗帳、吉川弘文館、(1980)、38(吉川弘文館の書籍では原典の鱷を判読不能としている。)
- 16) 会津若松史出版委員会編：会津若松市史第3巻、同会出版、(1965)、40-62.
- 17) 佐々木長生氏の私信(2006)